

実践報告 英語と日常的に触れるために(その2)

—「体温入力」指導による効果について—

キーワード:英語の日常化/習慣化/コロナ禍/授業外活動

堀内 ちとせ

0. はじめに

英語に対する学習意欲の乏しい医療系の学生たちの日常に、少しでも英語を浸透させようと、2012年度より、担当クラスの学生たちに対して、「英語活動・実体験レポート」の試みを行っている。「英語活動・実体験レポート」とは、学生たちに、日々の「英語活動」を記録させ、提出させる「日記(日誌)」のような「課題」である(堀内, 2013)。2022年度は、この「課題」を始めて10年目に当たる。本稿は、その『英語活動・実体験レポート』についての報告の第2弾である。

毎日放送される「ラジオ講座」に「語学講座」が並ぶことから分かるように、「語学学習」には特に「日々取り組む」姿勢が欠かせない。そこで、今回は、学生たちの「英語活動・実体験レポート」の日々の「取り組み」の実態を、意外にも、2020年度からの「コロナ禍」における影響と絡めて(!)、医療系大学の医療系クラス93名を対象に、検討してみたい。

1. 「英語活動・実体験レポート(English Activity)」について

1.0 「English Activity」の意義

2012年度より、「紙媒体」の形で始まった、「英語活動・実体験レポート(堀内, 2013)」は、勤務校での「授業用資料」のデジタル化が進む中、コロナウイルス感染予防のための、2020年度の完全「配信授業」を機に、完全「デジタル版」へと変化した。2022年度現在では、「English Activity」として存在している。

「English Activity」は形や名前こそ変わっても、その存在意義は、10年前も今も同じである。学生たちが「自然な形」で英語と触れ合うことができるような、「習慣づけ」のための「課題」である。

「習うより慣れよ(Practice makes perfect.)」という諺からも分かるように、「語学力」と「習慣力」とは切っても切れない関係にある。その一方で、「三日坊主」という言葉もある。人間は「飽きっぽい」生き物でもあるのだ。

そういった意味でも、日々の「課題」として課される、この「English Activity」は、「英語が苦手」な学生の「英語力アップ」へのカギともなる可能性を秘めている。

1.1 デジタル版「English Activity」

「English Activity」は、「英語活動・実体験レポート」であった 2012 年度から 2019 年度は、「紙媒体」での「提出課題」であった。日々の実施・記録については、各学生たちに全て任されていた。授業は週1のペースであるため、学生たちには1週間分の記録をまとめて提出してもらおうしかなかった。

その頃は、実際に実施していなくても、適当に記入・提出されるような場合もあったかもしれない。かなり先の分までの「English Activity」の記録を、隠し持っている学生を見かけたことも記憶している。担当学生たちが、全てそうであったわけではないと信じたいが、実際のところ、「英語に日々触れる」ための「English Activity」が、ある意味、形骸化していたことは否めない。

2020 年度、コロナウイルス感染予防のため、全授業がオンラインになったのを機に、「英語活動・実体験レポート」も、「デジタル版」の「English Activity」へと姿を変えた。授業内の資料のアップに利用していたこともあり、「English Activity」を「デジタル化」するに当たって、e ラーニング (Moodle) の「アンケート機能」を利用することとした。

「English Activity」が「デジタル版」になってからは、e ラーニング (Moodle) の「アンケート機能」の特徴上、本来の目的にかなった、「毎日記入(入力)」しなくてはならないような「仕組み」が実現した。

中には、「活動」自体は(例えば1週間)まとめて行っておいて(あるいは、実際は実施していなくても、実施したように装い)、「記入(入力)」のみ、毎日、実施していた学生がいないと言い切れない。とは言え、多くの学生については、毎日、何かしら英語に触れ、「毎日記入(入力)」せざるを得なくなったことは、間違いない。

この e ラーニング (Moodle) の「アンケート機能」のお陰で、学生たちの日々の「取り組み」を確認するのも手軽となった。学生たちの「入力データ」は、全てダウンロードした「Excel シート」上で確認できるようになったのだ。

1.2 「体温入力」チェックと「English Activity」

2021 年度、少しずつ対面授業が始まってきたものの、まだなお、コロナウイルス感染予防のため、学生たちは日々の「体温チェック」が求められていた。2021 年 8 月末の「コロナウイルス蔓延防止」の規制が出たことをきっかけに、勤務校では、日々の学生たちの「体温チェック」の「入力状況」を確認することとなった。

「体温入力」のシステムも、「English Activity」と同じく、e ラーニング (Moodle) の「アンケート機能」の形式であったこともあり、担任クラスの学生たちの「体温入力」を日々管理するのは、筆者が担当

することになった。

英語の担当クラスの「English Activity」であれば、学生たちの「取り組み」状況を、毎日、確認するようなことはなかっただろう。実際、前期の学生たちの「English Activity」の「取り組み」について、学期末にまとめてデータをダウンロードし、確認することどまっていた。

「体温入力」チェックについては、勤務校全体に関わることである。従って、学生たちの「体温入力」のデータを毎日ダウンロードし、「体温入力」の未入力回数を記録、管理する必要があった。

担任クラスの主任の考えで、「未入力回数」が10回を超えた時点で、その学生を呼び出し、担任全員（主任以外に、3人の担任がいた）で面談することとなった。その際、学生は、クドクド小言を聞かされるのみならず、主任の考えにより、次のような「反省文」なるものが課された。「反省文」には、

1. 問題が生じた原因は何ですか？
2. どうすれば、その原因を改善できると思いますか？
3. 原因を改善すれば、大学生活にどのような影響があると思いますか？
4. 原因を改善することで、地域社会に貢献できることは何ですか？
5. 原因を改善することで、医療現場に役立つことは何ですか？

また、何故そう思ったのか理由も記載する。

といった「記述必須」項目が五つあり、「面談」対象となった学生たちは、1～5までの全項目において、「未入力回数分」以上（例えば、未入力回数が10回であれば、10個以上）、書き出さなければならぬという罰則(!)が課せられることとなったのだ。

この「反省文」はかなり大変なものであるが、その「大変な」事態を招かないよう、学生自身自覚して「未入力」とならないよう注意してほしいという、主任の強い「願い」がうかがわれた。

学生たちの体温の入力データ確認係である筆者は、日々の「未入力」学生個々人に、「未入力」の連絡を「個人メール」で行った。また、主任は、「未入力学生」の「学籍番号」を全て掲載した「警告メール」を、(土日を除いた平日は)毎日、クラス全体に「全体メール」で送り続けた。「無記名」と言っても、「学籍番号」で自分の醜態(!)がクラス全体に曝されるのである(筆者であれば、その事態回避のため、必死で努力するだろう)。

筆者は、学生たちの「体温入力」状況を日々管理する中で、英語の担当学生たちへの日々の課題である、「English Activity」のことを考えていた。日々の「体温入力」状況を、長期に渡って継続的に指導されれば、学生たちの「習慣力」そのものの方も、間違いなく、鍛え上げられるのではないかと、考えないではいられなかった。

2. 「今回の調査」について

2.0 対象クラス

そこで、今回は、2021年度「後期」に、「体温入力」指導を細やかに行ったクラスの、「体温入力」指導前の、「English Activity」への「取り組み」状況(2021年度1年次前期)と、「後期」の「体温入力」指導後の同クラスの、「English Activity」への「取り組み」状況(2022年度2年次前期)とを比較してみることにする。

2021年度、後期の細やかな「体温入力」指導は、教員側の「習慣力(継続力)」がなければできないような「代物」であった(と、自負している)。担当学生たちが、コロナウイルス感染予防のため、日々の「体温チェック」が、習慣的にできるようになると同時に、日々「英語に触れる」という意味での「English Activity」の実施状況にも、良い影響が現れていることを期待したい。

2.1 方法

「体温入力」指導を実施したクラスの、2021年度前期(1年次)、2022年度前期(同クラス、2年次)における、「授業」が実施されていた期間中の、学生たちの「English Activity」への「取り組み」(入力)回数の、平均値(回数/週)を求め、比較・検討を行う。

3. 結果と考察

3.0 『「体温入力」指導クラス』における「English Activity」の「取り組み」の推移

「体温入力」指導を実施したクラスの、指導前の「平均値(2021年度・1年次)」と、指導後の「平均値(2022年度・2年次)」、さらに、その「平均値」の差(「2022年度の平均値」-「2021年度の平均値」)を次に示す。対象クラスの学生の人数が多いため、三つに分けて示すことにする。

「指導前」の1年次の「平均値」に焦点を当て、平均値の最も小さいもの(「平均値」が「0」、つまり、「English Activity」の「取り組み」が一度も見られなかった学生)から、「平均値」の最も高いもの(「平均値」が「7」、つまり、7日間一度も欠かさず「取り組み」を続けていた学生)の順に示す。なお、1年次の「平均値(表の左端)」の右隣りは、同一学生の2年次の「平均値」、さらに、同一学生の、2年次と1年次の『「平均値」』の差(表の右端)の順である。

同一学生の、1年次と2年次の「平均値」を比較した際、「値が大きいもの」に、ハイライト(黄色)した。2年次と1年次の「平均値」の「差」については、「平均値」の「差」が「-2未満」(2年次に「平均値」が最も減少している学生)を茶色、「-2以上-1未満」を赤色、「-1以上0未満」を橙色、「0以上

1未満」を黄色、「1以上2未満」を黄緑、「2以上3未満」を緑色、「3以上4未満」を水色、「4以上」(2年次に「平均値」が最も増加している学生)を青色で色分けして示した。

2021年度	2022年度	2022年度－2021年度
0.0	0.1	0.1
0.0	4.1	4.1
0.1	3.1	3.0
0.3	0.9	0.6
0.4	0.7	0.3
0.7	4.7	4.0
0.9	1.0	0.1
1.0	3.6	2.6
1.1	2.0	0.9
1.3	2.3	1.0
1.4	3.3	1.9
1.4	3.6	2.1
1.6	0.3	-1.3
1.6	2.0	0.4
1.6	3.0	1.4
1.8	2.9	1.1
2.3	1.0	-1.3
2.3	3.1	0.9
2.3	6.1	3.9
2.4	0.9	-1.5
2.4	4.9	2.5
2.6	4.0	1.4
2.6	5.7	3.1
2.6	1.1	-1.5
2.8	3.1	0.4
2.9	2.3	-0.6
2.9	2.4	-0.4
2.9	4.1	1.3
2.9	4.3	1.4
2.9	4.4	1.6

表1 『体温入力』指導クラスにおける「English Activity」の「取り組み」(その1)
—2021年度(1年次)と2022年度(2年次)の「平均値」とその「差」(その1)—

2021年度	2022年度	2022年度－2021年度
3.0	2.1	-0.9
3.0	3.3	0.3
3.0	3.7	0.7
3.0	5.4	2.4
3.0	5.4	2.4
3.1	1.9	-1.3
3.1	2.1	-1.0
3.1	3.9	0.7
3.1	4.0	0.9
3.1	4.9	1.7
3.3	2.1	-1.1
3.3	2.7	-0.5
3.3	3.9	0.6
3.3	3.9	0.6
3.3	4.7	1.4
3.4	2.6	-0.8
3.5	3.1	-0.4
3.5	3.4	-0.1
3.5	3.4	-0.1
3.5	4.1	0.6
3.5	4.6	1.1
3.5	4.7	1.2
3.5	6.0	2.5
3.6	2.1	-1.4
3.6	3.9	0.3
3.8	3.1	-0.6
3.8	3.9	0.1
3.8	5.6	1.8
3.9	4.7	0.8
3.9	5.3	1.4
3.9	5.6	1.7
3.9	6.6	2.7

表2 『体温入力』指導クラスにおける「English Activity」の「取り組み」(その2)
 —2021年度(1年次)と2022年度(2年次)の「平均値」とその「差」(その2)—

2021年度	2022年度	2022年度－2021年度
4.0	3.1	-0.9
4.0	5.4	1.4
4.0	6.1	2.1
4.1	4.4	0.3
4.1	4.6	0.4
4.1	4.3	0.1
4.1	4.6	0.4
4.3	5.7	1.5
4.4	5.9	1.5
4.4	3.1	-1.3
4.4	4.6	0.1
4.5	3.7	-0.8
4.5	5.4	0.9
4.6	4.1	-0.4
4.6	5.7	1.1
4.9	2.6	-2.3
4.9	5.3	0.4
5.4	3.4	-2.0
5.6	5.0	-0.6
5.7	3.3	-2.4
5.7	5.1	-0.6
5.9	4.4	-1.4
5.9	7.0	1.1
6.0	5.1	-0.9
6.0	5.3	-0.7
6.3	5.9	-0.4
6.4	4.1	-2.3
6.4	4.4	-2.0
6.6	6.1	-0.4
7.0	4.6	-2.4
7.0	7.0	0.0

表3 『体温入力』指導クラスにおける「English Activity」の「取り組み」(その3)
 —2021年度(1年次)と2022年度(2年次)の「平均値」とその「差」(その3)—

3.1 表1～表3 で分かること

表1～表3に示した個々のデータを、「色分け」した「色」をもとに、見ていくことにする。

2021年度(1年次)の「平均値」が最も低いグループである表1では、表2・表3と比べて、2022年度(2年次)に「平均値」が増加している(2022年度の「平均値」の方が黄色にハイライトされている)学生が、比較的多く見られることが分かる(24人/27人 \doteq 0.89>21人/32人 \doteq 0.66, 13人/31人 \doteq 0.42)。一方、2021年度(1年次)の「平均値」が最も高いグループである表3では、表1・表2と比べて、2022年度(2年次)に「平均値」が減少している(2021年度の方の「平均値」の方が黄色にハイライトされている)学生が、多く見られる(16人/31人 \doteq 0.51>11人/32人 \doteq 0.34, 6人/27人 \doteq 0.22)。

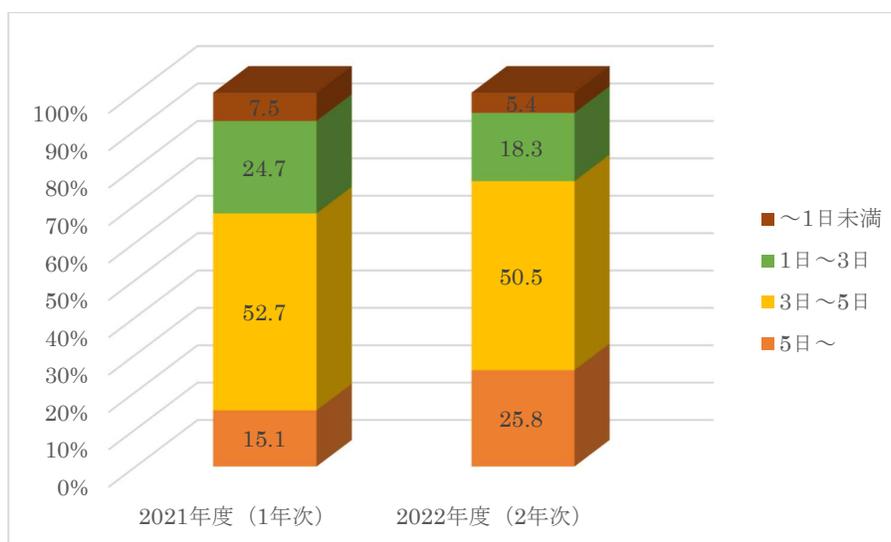
次に、「平均値」の「差」の値に目を向けてみることにする。

「平均値」の「差」が「4以上(青色)」、「3以上4未満(水色)」といった、比較的大きい値の「差」が見られるのは、2021年度(1年次)の「平均値」が最も低いグループ(表1)である(青色2人・水色3人)。つまり、2021年度(1年次)の時点では、「取り組み」率が低かった学生たちに、大きな飛躍が見られたということである。

例年の「取り組み」状況を見ても、2年生で「取り組み」状況が大きく向上するということは、まずない。悲しいかな、人間は基本的には、「怠慢な」生き物であるのだ。それにもかかわらず、今回のような「結果」となったわけである。英語の専門というわけでもないため、突然、英語への向学心(!?)に目覚めたということは考えにくい。ただ一つ、学生たちに影響を及ぼしたかもしれないのが、「体温入力」指導なのである。

反対に、「平均値」の「差」が「-2未満(茶色)」、「-2以上-1未満(赤色)」といった、比較的大きめの負の「値」の「差」が多く見られるのは、2021年度(1年次)の「平均値」が最も高いグループ(表3)である(4人・赤色4人)。こちらは、2021年度(1年次)の時点では、比較的良い「取り組み」状況だった学生たちが、2年生になって、気持ちも緩んでか(これが、多くの人間の流れではないだろうか)、「English Activity」の「取り組み」状況も悪くなったことを示している。

3.2 『体温入力』指導クラスにおける「English Activity」の「取り組み」



Note. 『体温入力』指導クラスにおける、2021年度および2022年度に対する、「English Activity」への「取り組み」の結果。縦軸は、下より「5日以上」・「3日以上5日未満」・「1日以上3日未満」・「1日未満」実施した学生の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図1 『体温入力』指導クラスにおける「English Activity」の「取り組み」

図1は、「『体温入力』指導クラス」における、2021年度(1年次)および2022年度(2年次)に対する「English Activity」の「取り組み」結果を一つのグラフ上に示したものである。

1週間のうち、3日以上実施している学生の割合(図1の橙色と黄色部分)を見てみると、2022年度、つまり、2年次での「取り組み」の方が、割合が高いことが分かる(25.8%+50.5%=76.3% > 15.1%+52.7%=67.8%)。中でも、1週間に5日以上の実施のある学生の割合(図1の橙色)に、10%以上の大きな飛躍が見られる(15.1%→25.8%)。また、1日未満しか実施のない学生(図1の部分)においては、僅かではあるが、減少も見られる(7.5%→5.4%)。

言いかえると、「1週間に1日未満(図1の茶色部分)」の学生は「1日以上3日未満(図1の黄緑色部分)」に、「1日以上3日未満」の学生は、「3日以上5日未満(図1の黄色部分)」に、「3日以上5日未満」の学生は「5日以上(図1の橙色部分)」に、ランクアップしたかのような結果となっている。

『体温入力』指導クラス」における、2021年度(1年次)、および2022年度(2年次)に対する、「English Activity」の「取り組み」結果の平均値の差を優位水準1%の両側検定により検討したところ、有意差が見られた($t(92) = 2.93, p < .01$)。

4. おわりに

今回は、英語とは縁遠いと思われる、「体温入力」についての細やかな指導と、「English Activity」への「取り組み」に対する「効果」という、突飛な(?)結びつきについて、検討してみた。

コツコツ取り組めるという「性質」を、もともと持ち合わせている学生もいる。持ち合わせていたとしても、2年になり他の専門科目が多くなると、「英語は程々でいいかな」と思いがちである。実際、今回の調査でも、2021年度(1年次)の「English Activity」の「取り組み」における上層部(1週間の「取り組み」率の「平均値」が高いグループ)で、比較的大きな「平均値」の減少が見られた(3.1参照)。

そんな中でも、今回の調査で、2021年度(1年次)の「取り組み」の「平均値」が比較的低めの学生たちが、ここまで頑張れたのは、2021年度(1年次)後期の細やかな「体温入力」指導の「効果」が確実に出ていて、強く感じている次第である。その裏付けのために、「体温入力」指導の全くなかったクラス(別クラスにはなるが)の、1年次と2年次での「English Activity」の「取り組み」状況について、追って調査・検討してみたい。

「語学学習」には、「習慣力」は必須である。「English Activity」などを通して、学生たちには、「習慣力」を身につけてもらい、「英語の授業」が終わってからでも、自力で「英語力」を高めていけるようになってほしい。そのための「授業」での一工夫の「閃き」を得るためにも、日々の学生たちの小さな「つぶやき」にも耳を傾けながら、学生たちと共に日々模索し続けていけたらと思う。

謝辞

2021年度、「体温入力」指導で大変お世話になった、藤田医科大学、医療科学部、放射線学科の南一幸先生、高野一樹先生に、心より感謝を申し上げたい。

参考文献

協同学習法ワークショップ<Basic> 2009年改訂版 日本協同教育学会.

堀内ちとせ(2013)「英語の日常化を図るために — 『英語活動・実体験レポート』の試みについて —」 *Language & Literature* (Japan) 第22号 82-94. 愛知淑徳大学大学院英文学会.

安永悟(2012)『活動性を高める授業づくり — 協同学習のすすめ —』医学書院.